

未来 mirai

一人一人が夢をもち
未来を生きる力のある子



琉球大学教育学部附属小学校

学校だより 第3号

発行 令和6年 6月17日(月)

文責 校長 石川 博久

沖縄戦を自分事として捉えてもらいたい

先週 6/13(木)、学校では「平和集会」を体育館で実施しました。6年生の平和集会実行委員会の皆さんが、沖縄戦について調べたことや読み聞かせをしながら、全児童で沖縄戦を振り返り、これから平和について考えていくことを確認しました。そして、6年生が「総合的な学習の時間」や「音楽の学習」を通して学んだ「HEIWAの鐘」の歌を合唱し、二度と戦争をしないことを誓いました。最後に校長先生からは、三つの場面(下記写真①~③)を大型スクリーンに提示しながら、沖縄戦を自分のこととして捉え、犠牲になった方々のこと考え、これからの自分の行動につなげてもらいたいという話がありました。子供たちは真剣な態度で聞き、考えていました。

写真①では、地獄だったという戦時中の状況・事実を調べながら、壕の中での住民の気持ちを考えること
②沖縄戦で亡くなり平和の礎に刻銘された家族の名前をさわるお婆一の気持ちを考えること、終戦したが、心が癒されることはなかった、戦争は今も終わっていないこと
③なぜ、人は戦争を繰り返すのか、戦争を繰り返さないために、10年後、20年後、戦争のない幸せな社会を自分たちの力で創っていくことができるように、今、何を学び、どのような力をつけるのか そのために何をどのように取り組むのか

以上のことを年間を通して、学級で、家庭でも、自分事として捉え、戦争を繰り返さないために今、自分ができることを、自分たちができることを考えてもらいたいことをお願いしました。



平和の礎(いしじ)



戦争を繰り返さないために

今回は、平和を考えることに関連して、私が書いた6/16(日)琉球新報の新聞「未来へのいっぽにほ」のコラム記事を紹介します。親子で読まれて、家庭でも平和を考えるきっかけにさせていただきたいです。

私は昨年度、沖縄戦の記憶継承プロジェクトの学習会に参加し、専門家や体験者の話を聞き、戦跡を巡った。戦争の犠牲となり命を失った方々や、生き残ったがいまだ心の傷が残り、それを背負って生きている方々一人一人のつらく悲しい事実を知った。その事実を知れば知るほど、戦争を繰り返さないために、体験者ではない私が今できることを考えた。教師として沖縄戦を学び直し、どのように子供たちにその事実を伝え、共に考え、自分事として捉えさせていくのか。

私が6学年の担任で平和を考える授業を行った時に「大切な多くの命が亡くなり、街や生活が一瞬にして破壊されてしまうと分かっているのに、なぜ人は戦争を繰り返すのだろうか」と問いかけたことがある。子供は「自分たちのことしか考えていないからだよ」と即答した。その通りだと思った。

だから私は、学級・学校を「小社会」と見立てて、子供たちが安心して笑顔で生活できることを考えている。課題があれば一緒に話し合い、決まった改善策を仲間と協働しながら実践する。常に自身の行動が他者に与える影響を考えながら、このような実践を小学校低学年から計画的・系統的に取り組むのだ。

一見、戦争を繰り返さないことと別の話のように聞こえるかもしれないが、学校教育の現場でこのような実践を積み重ねることこそが、子供たちがこれから直面する共同の問題を自分事として捉え、幸せな社会を自分たちの力でつくることにつながると考えている。

戦争を繰り返さないために、これからも自分の立場でできることを考え行動し続ける。